UENO Toshihiko; uenot_gosudarstvo@yahoo.co.jp; http://www.geocities.jp/collegelife9354/index.html

1. 日露関係の黎明

1. 日露の出会いアイヌ･モシリへの進出

1.1. アイヌ人の土地（アイヌ・モシリ）だった千島列島（Кури́льские острова́ / Kuril Islands）とサハリン（Сахали́н / Sakhalin）

Кури́льские острова́ / Kuril Islands の Кури́л / Kuril の語源は、アイヌ語の「クル kur」（「ひと」または「影」の意）から来ている。

千島列島はすべてアイヌ語地名地域である。

歯舞（ハボマイ）群島[1]＝ハポ（母）・マ（泳ぐ）・イ（ところ）

水晶（スイショウ）島＝シィ（豊かな）・イソ（磯）

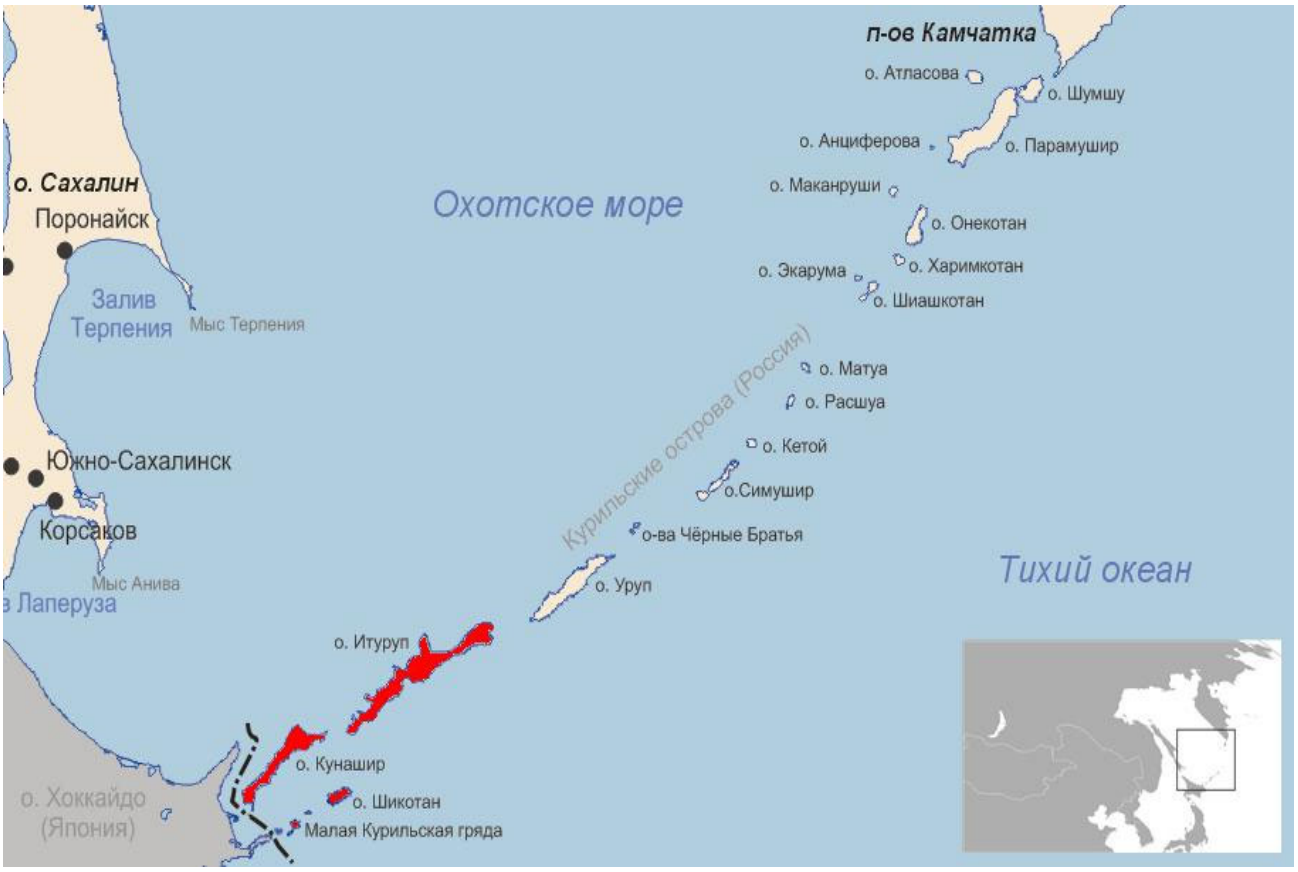
秋勇留（アキユリ）島＝ア（私）・キロロ（高台）・モシリ（島）

国後（クナシリ）島＝クンネ（黒いところ）・アン（ある）・シリ（島）

択捉（エトロフ）島＝エト（鼻）・オロ（そのところ）・プ（盛り上がる）

サハリン中部のポロナイスク（Поронáйск / Poronaisk 旧日本名：敷香シスカ）はサハリン最大の川、ポロナイ川河畔にあるところからつけられた。ポロ（大きい）・ナイ（川）

千島列島



[1] ロシアの地理区分では、色丹島（Óстров Шикотáн / Shikotan Island）および歯舞群島を合わせて小クリル列島（Мáлая Кури́льская грядá / Lesser Kuril Ridge）と言う。歯舞群島は、多楽（タラク）島（Óстров Полóнского / Polonsky Island）、海馬（カイバ）島（Óстров Оскóлки / Oskolki Island）、志発（シホツ）島（Óстров Зелёный / Zeleny Island）、水晶（スイショウ）島（Óстров Танфи́льева / Tanfilyev Island）、勇留（ユリ）島（Óстров Ю́рий / Yuri Island）、秋勇留（アキユリ）島（Óстров Ану́чина / Anuchin Island）、春苅（ハルカリ）島（Óстров Дёмина / Dyomin Islands）、貝殻（カイガラ）島（Óстров Сигнáльный）などからなる。

1.2. 日露の出会い

1695/6 年　大阪谷町筋の質屋「万久」の息子・伝兵衛、カムチャトカ（Камча́тка / Kamchatka Peninsula）に漂着。

1697 年　アナディリ[2]（Ана́дырь / Anadyr'）砦のカザーク隊長アトラーソフ（Влади́мир Васи́льевич Атла́сов / Vladimir Vasil'evich Atlasov, 1661?-1711）、カムチャトカ西岸イチャ（Ича）川のほとりで「礼儀正しい」日本の漂着民デンベイ（伝兵衛）に出会い、彼をヤクーツク（Яку́цк / Yakutsk）に送る。

アトラーソフ

1701 年　デンベイ、モスクワに入る。

1702 年 2 月　ピョートル 1 世、デンベイに謁見し、日本語教育の実施を命ずる。

1705 年　デンベイ、（砲兵庁の）軍人子弟のための学校の日本語教師となる。

1710 年　日本の漂流民サニマ（Санима / Sanima 佐沼あるいは浅沼という姓？）、カムチャトカに漂着。

1711-13 年　サニマ、カザークのコズィレフスキー（Ива́н Петро́вич Козыре́вский / Ivan Petrovich Kozyrevskii, 1680-1734）による千島列島北部 2 島の探検に同行。

1729 年　薩摩のソーザ（Содза 惣左？35 歳）とゴンザ（Гонза 権佐？11 歳）、カムチャトカに漂着。サンクト・ペテルブルクへ移送。

1733 年　アンナ女帝、ソーザとゴンザに謁見。

1736 年　サンクト・ペテルブルクにソーザおよびゴンザを教師とする日本語学校が開校（「学校」と言えるものかどうか疑問とする説もある）。

　この頃、ゴンザと科学アカデミー司書アンドレイ・ボグダーノフ（Андре́й Богда́нов / Andrei Bogdanov、サニマとロシア人女性との間にできた子との説があるが疑わしい）、露和辞典[3]（正確には露薩辞典）と日本語（正確には薩摩弁）文法書を執筆。サンクト・ペテルブルクの日本語学校は 1750 年代にイルクーツク（Иркутск）に移設（1810 年頃まで存続）。

1754 年　松前藩、クナシリ島に「場所」（アイヌとの交易場）設置。

1766 年　日本語を解する貴族アンチーピン（Ива́н М. Анти́пин / Ivan M. Antipin）とイルクーツクの商人シャバーリン（Дми́трий Я. Шаба́лин / Dmitrii Ya Shabalin）、ウルップ島を訪れ、アイヌと和解。

1766～69 年　カザークのイワン・チョールヌイ（Ива́н Чёрный / Ivan Chernyi）、ウルップ島、エトロフ島に至り、アイヌにヤサーク（毛皮税）を課す。チョールヌイの乱暴狼藉にアイヌの不満高まり、1769 年にチョールヌイが引き上げたあと、ロシア人がアイヌ人に襲撃され 21 人が殺害。

1772 年　日本との接触の模索始まる。

1775 年　幕府、千島列島、サハリンの探検開始（最上徳内ら）。

1775 年頃　対露反乱軍に加わりカムチャトカ流刑となったスロヴァキア人のベニョフスキー（Móric Beňovský）の反露情報、オランダ商館経由で流布。

1778 年　シャバーリン、根室で松前藩士に書簡を渡し交易を求める。

1779 年　シャバーリン、厚岸で松前藩代表と会うが、交渉進展せず。

1781～3 年　工藤兵助『赤蝦夷風説考』。ベニョフスキーをロシアと戦争したドイツ人で、オランダも反露説で日本側を操作しようとしていると説く。

1786 年　ベニョフスキーの反露情報をオランダ商館経由で入手（1775 年）した林子平、ロシアを強く警戒すべきと説く『三国通覧図説』を著す。

1787 年　林子平『海国兵談』。

1789 年　クナシリ島でアイヌ人が反乱、松前藩が鎮圧。

---

[2] 現、チュコトカ自治管区（Чуко́тский автоно́мный о́круг / Chukotka Autonomous Okrug）の行政中心地（администрати́вный центр / Administrative Center）。

[3] 現代語訳は、ゴンザ・村山七郎編『新スラブ語・日本語辞典』ナウカ、1985 年。

2. 日露開国交渉の始まり

2.1. 大黒屋光太夫とキリル・ラックスマン

キリル・ラクスマン

1782 年　伊勢国白子の回米船神昌丸の船頭、大黒屋光太夫ら乗組員 16 名、7 ヶ月の漂流の末、アレウト（アリューシャン）列島（Алеу́тские острова́ / Aleutian Islands）アムチトカ島（О́стров Амчитка / Amchitka Island）に漂着。ロシア人に引き取られ、そこで 4 年間を過ごす（7 人死亡）。

1787 年　光太夫ら、船を建造、カムチャトカに渡り（そこで 3 名死亡）、カムチャトカ長官に帰還を願い出る。

1789 年　光太夫、カムチャトカ長官の手紙を持ってイルクーツクの東シベリア総督に帰国を嘆願するも、拒否される。光太夫、スウェーデン人の博物学者・化学者でペテルブルク大教授のキリル・ラックスマン（Э́рик (Кири́лл) Густа́вович Ла́ксман / Eric (Erich) Laxman, 1737-96）に出会う。

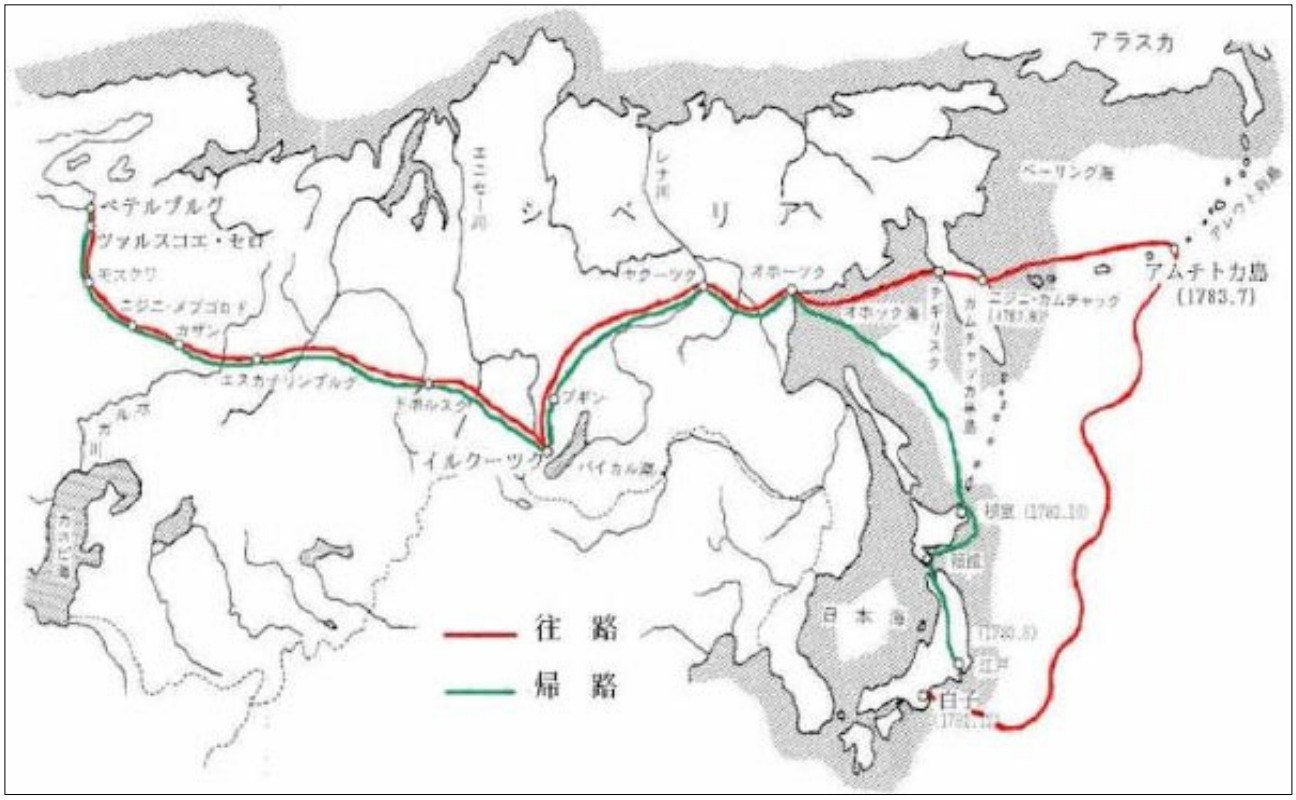
1791 年　キリル・ラックスマン、光太夫をペテルブルクに連れて行く。到着して 4 ヵ月後にエカチェリーナ 2 世に拝謁を許され、帰国が許可される。キリル・ラックスマンの子息の陸軍中尉アダム・ラックスマン（Ада́м Кири́ллович (Э́рикович) Ла́ксман / Adam Laxman, 1766–1796?）を通商使節として日本に派遣する案が採用される（皇帝の親書ではなく、シベリア総督ピーリ（Ива́н Алфе́рович Пиль / Ivan Alferovich Pil', ?-1801）の書簡を持って訪日すると決定）。

1792 年　使節一行と光太夫らオホーツクを出航し根室に入港

1793 年　アダム・ラックスマンの船、箱館に入港し、陸路で松前に入る。幕府代表石川将監、シベリア総督ピーリの書簡受け取りを拒否し、長崎入港許可証を与える

1794 年　桂川甫周、光太夫からの聞き取り、『北槎聞略』（ほくさぶんりゃく）を出版[4]。岩波文庫として 1990 年出版）

大黒屋光太夫のシベリア横断



[4] 桂川甫周『北槎聞略』岩波書店、1990 年。

2.2. レザーノフ使節と高田屋嘉兵衛

1799 年　レザーノフ（Никола́й Петро́вич Реза́нов / Nikolai Petrovich Rezanov, 1765-1807）露米会社設立（アラスカ、カリフォルニアへの毛皮商人の進出）。

1802 年　アレクサンドル 1 世、レザーノフの対中･対日交易の可能性を探る提案を許可。

1804 年　レザーノフ、皇帝の国書を持って長崎入港。

1805 年　交渉は失敗。

1806～7 年　レザーノフ、サハリンを襲撃。

1811 年　ディアナ号艦長ゴロヴニン少尉（Васи́лий Миха́йлович Головни́н / Vasilii Mikhailovich Golovnin, 1776-1831）、クナシリ島の湾内で松前藩士に攻撃され、捕虜となる。

1812 年　副艦長リコルド（Пётр Ива́нович Рико́рд / Petr Ivanovich Rikord, 1776-1855）、高田屋嘉兵衛（1769-1827）の協力でゴロヴニン釈放を勝ち取る。

レザーノフ

ゴロヴニン

リコルド

高田屋嘉兵衛